いのち育むもの

今年（平成１５年）の３月下旬、藤田徹文先生のご自坊を訪問しました。先生と古くから親交のある方々との私的な集まりの会でしたが、宗門の著名な方ともご縁が出来、大変有意義な一日でした。

先生のお寺は広島県にあり、昔から大変お念仏のみ教えが盛んな所で、いわゆる「ご法義の厚い」土地柄です。

道すがら、点在しているお墓を注意深く見ていますと、やはり「南無阿弥陀仏」と刻んだ墓石がもっとも多く、それ以外に「倶会一処」「斉入一味」という墓石も数多く見受けられました。

「倶会一処（倶に一処で会う）」とは、お念仏のみ教えに生きる者は、必ず阿弥陀さまの浄土でまた会うことが出来るという「阿弥陀経」にある言葉です。
また「斉入一味（斉しく一味に入る）」は、正信念仏偈の「凡聖逆謗斉廻入・如衆水入海一味」の大意を汲み取ったものだと思いますが、これは「凡聖逆謗斉しく廻入すれば、衆水海に入りて一味なるがごとし」と読み、「いかなる人であっても阿弥陀さまにおまかせすれば、何のわけへだてなく、ひとしく救われる。それはちょうど大河をゆっくりと流れてきた水も小川をせかせかと流れてきた水も、また清らかな水も汚れた水も、どのような水であっても大海に流れ込めば、何の分けへだてもなく一つの味になるようなものである」という意味です。

墓石に刻まれたこうした文字を見ていますと、この土地に生きた人々の暮らしぶりが偲ばれます。
おそらく、阿弥陀さまのお慈悲をこよなく喜び、先立った者もこの私も、また後に続く者も、倶に浄土に生まれさせて頂くんだという深い安心感に満ちた人生を送られた事と思います。
墓石の文字は「生きるも死ぬも、すべて阿弥陀さまにおまかせします」という決意の言葉のようにも思えました。

お念仏のみ教えはこのように、「いかに生きるか」ということだけでなく「いかに安心して死んでいけるか」ということを教えて下さるものです。

「死」の解決なくして「いかに生きるか」の答えは出て来ません。

いかに安心して死んでいけるか｜これは言うなれば、「死んだらどうなるか」ということです。
仏教ではこの問題を「後生の一大事」と言いますが、この問いに対して阿弥陀さまは「そんな人間の小ざかしい計らいは捨てなさい。心配しなくていい、私にまかせなさい」と

おっしゃっています。
私の方から言えば「まかせよとおっしゃる阿弥陀さまに私の丸ごとを預けて生きていきます」ということです。
これが浄土真宗の根本思想です。そうして、これ以外に「死んだらどうなるか」という問題を解決する道はありません。

「まかせよ」とおっしゃる以上、おまかせする以外ないのです。

ところが、このまかせるということが私たちに中々出来ないんです。
特に科学が進歩した現代では「阿弥陀さんの話なんかは到底信じられん。あれは作り話じゃ」と言うのです。
果たしてそうでしょうか？

私はまったく逆だと思います。科学の発達が、かえって人間の欲望を増大させ、「いのち」の本当のあり方を見えなくしていると思うのです。

ところで一体「いのち」とはどんなものでしょうか。

私たちは誰一人として、自分の意思でこの世に生まれてきた人はいません。気が付いてみたら、すでにこの世に存在していたのです。

これは「いのち」は自分で作り出したものではなく「頂きもの」だということを意味しています。

そうすると当然、その「いのちを生み出したもの」があるはずです。

「いのち」を生み出すものは、実は「いのち」しかないのです。
その生み出したいのちが「アミダ」と呼ばれるものです。
「アミダ」というのはインドの古い言葉で無量寿、無量光という意味です。

具体的に言いますと、私のこの「いのち」は親をご縁として量ることの出来ない長い長い「いのち」の歴史を頂いています。ということは、私のいのちは無量寿のはたらきを頂いたいのちです。
また、私が今ここに生きているこの空間（宇宙）に存在しているものを考えて見ますと、どれ一つ欠けても私の「いのち」は存在しません。その一つ一つを光と仰げば、私のいのちは文字通り無量光のはたらきを頂いたいのちです。

このように、私の「いのち」は、時間的にも空間的にも無限の広がりを持ち、しかも「いのち」を育むはたらきを持っているアミダ（無量寿、無量光）という大いなる「いのち」によって生み出されたもの、ということになるのです。

そのアミダの世界から姿かたちをもって、「いのちの本当のあり方に目覚めよ」と現われ出でた方を阿弥陀如来と申すのです。

阿弥陀さまが「計らいを捨てよ、心配するな」とおっしゃるのは「あなたが何にもしなくっても、この世界（宇宙）には、あなたを生かし続けるアミダと言う大いなるいのちのはたらきがあるのですよ」というメッセージなのです。

私たちの肉体はやがて寿命がくれば崩壊するでしょう。しかし、その「いのち」はアミダのいのちと一味になるのです。

前方には阿弥陀さまの浄土が見え、私を迎えてくれる大きないのちの世界がある。
私の「いのち」はやがて、そこへ帰って行くいのちだと知らされる時、もう心配なく生きられ、死んでいけるのです。
それが「斉入一味、倶会一処」ということなのです。

「仏法には明日ということはあるまじく候」と蓮如上人は仰っています。
「今死にたくないなー、心配だなー」と思っている方は、一刻も早く安心できる道を真剣に命がけで聞いてください。

平成１５年６月　　「光明寺だより２８号」より